「四境の役・大島口の戦い」戦跡&史跡ガイドマップ

1 徳正寺（東三蒲）

四境の役の際、この寺の住職であった田村探道は第二奇兵隊に属していた。常に隊員の士気高揚に努め、戦いでは身を挺して常に中心であった。同寺には、探道愛用の陣笠や御所入行許可書をはじめ隊士の書簡など、彼が第二奇兵隊書記として活躍したことを物語る貴重な資料がたくさん残されている。近くには狙撃訓練場跡（神取神社）もある。

2 世良修蔵招魂碑（椋野）

世良修蔵は、兵学や語学（英語）にも卓越し、四国遍路の大先達、中司茂兵衛とは従兄弟にあたる。明治15年（1882）、世良の生まれ故郷である椋野の久保山（世良家墓所）に建てられた招魂碑。これに刻まれている天地開久の碑文は、陸軍中将兼参謀内務卿歳定官山田顕義 篆額、内閣権少書記官正七位 岡守節 書、常陸 加藤熙 撰である。

3 明治維新百年記念公園（久賀）

園内には、明治維新の大事業に身を持って尽くした方々のふっての顕彰碑（精忠不朽・竹中基助ほか18名・秋元三郎ほか16名・庄屋伊藤惣兵衛）がある。精忠不朽の碑は毛利元徳の書によるが、大洲鉄然が後世に伝えるため郷友と諮って建てたもので、門柱は元大島郡役所の石柱を移築した由緒あるものである。

4 覚法寺（久賀）

大洲鉄然の生誕地で、山門は久賀古町の中村錺鍛作、彫刻は地元西方の門井耕雲の作といわれる。本堂の「崇徳興仁」の額は、五摂家・九条道孝公の筆である。同寺には、桂小五郎や勝海舟など維新期に活躍した人物にまつわる資料も数多く残され、鉄然の交友関係の広さがうかがえる。所蔵する資料の豊富さから私設歴史民俗資料館と言っても過言でない。

5 伊藤惣兵衛（藤屋）（久賀）

代々庄屋を務めた伊藤家（藤屋）の屋敷で、月性や大洲鉄然がよく会談で用いた。四境の役で久賀の町は焼け野原になったが、酒屋であった藤屋は両軍に酒を振る舞ったことから焼き討ちを逃れ、多くの貴重な財産が残ったという。

津原川沿いには白壁の塗やとした旧家が多く、町教文化が色濃く残っている。明治維新記念公園内には、当時の当主で、維新に功績のあった惣兵衛の顕彰碑も建立されている。

6 村田邸（砲弾貫通）（久賀）

幕府軍艦（富士山丸）から発射された砲弾が、住居の壁と大梁を貫き裏側の田畑に着弾した。大梁の大きな傷跡は現在もその まま残され、砲弾の威力の凄さを物語っている。幕府軍が敗退するとき火を放ち、当家から宗光の住吉神社が見えるほど焼失したと云われている。

「弾」は不発弾であるが、砲弾のほか、郎には当時を偲ぶ多くの品々等が保管されている。

7 八田山維新墓地（久賀）

軍艦4隻小舟多数により幕府軍約1,000人が久賀村宗光より上陸、同時に安下庄へ5軍艦2隻を主流に松山藩軍約1,500人が上陸して大島を占領。長州軍は第二奇兵隊、浩武隊、大島兵などの諸隊で応戦9日間の激戦の末、幕府軍を海上に潰走させた。この戦闘で亡くなった18名とその他維新ゆかりの人々5名、合計23柱の墓碑があり、招魂社として祀られている。

8 楢崎剛十郎生誕地（久賀）

楢崎剛十郎生誕地は、小川の清流がせせらぐ山峡にある。その奥には開静な隠れ穴があり、そこで真武隊再結成の秘密会談が行われた。剛十郎が、白井小助や大島郡内の志士たちの案内役となり、再結成に必要な資金、再結成後の本陣場所などを検討した当時が偲ばれる。彼の顕彰碑は山口県大島庁舎前に建立されている。

9 帯石観音（普門寺）（日前）

長州軍の守備隊（村上河内）がこの寺に本陣を置いていたが、松山藩軍の安下庄上陸後は、松山藩軍と久賀の幕府軍との連絡拠点となった。6月15日に長州軍と幕府軍の戦いの場となり、その後焼失した。火を放ったのは幕府軍・長州軍のご説ありどちらかは不明。境内には、安産祈願の帯石観音や奉納された宝物、村上水軍末裔墓碑などがある。

「大島口の戦い」概略　（慶応二年）

- 6月7日　幕府軍艦が上関・安下庄・油宇を砲撃
- 8日　幕府軍が油宇を砲撃後上陸、松山藩軍が安下庄を砲撃
- 11日　幕府軍が久賀、松山藩軍が安下庄に上陸
- 12日　長州軍が遠崎へ集結
- 13日　長州軍の丙寅丸が前島沖の幕艦を夜襲攻撃
- 14日　長州軍が遠崎から笠佐島へ渡海（18時頃）
- 15日　長州軍が大島へ着岸、四手に分かれて進軍
  - ○村上亀之助隊等は碇が峠から国木台へ
  - ○村上河内隊等は鬼が峠から久賀の国木台へ
  - ○第二奇兵隊等は西蓮寺から笹水峠、帯石へ
  - ○大島郡兵等は沖浦へ
- 16日　長州軍と松山藩軍が笛吹峠・源明峠・三ツ石で決戦　松山藩軍退却
- 17日　長州軍が久賀総攻撃（幕府軍敗退）
- 19日　幕府軍が久賀を再攻撃、奪略・放火し、20日に退却

10 浄西寺（油宇）

慶応2年（1866）6月8日午前7時頃、幕府軍艦が油宇を砲撃した際、砲弾の一つが浄西寺の石垣を直撃した。石垣にはその時の弾痕が今も残る。地元には、この時、農夫の綾「せん」が大砲の音に驚き幼子を背負い飛び出したところ、地響きとともに砲弾が炸裂し爆死したという話が伝わっている。砲撃の後、上陸した幕府軍は油宇から伊保田に進み、地図や携指し物を奪って引き揚げたという。

11 快念寺（西安下庄）

松山藩軍は三ツ松に上陸し、この地の守備隊村上亀之助との甲の山での銃撃戦を制し、この寺に陣屋を置いた。この戦いで安下庄の町は、1,410軒のうち628軒が焼失したという。安下庄湾は自然の良港で軍艦の投錨地となり、松山藩軍はこの寺に陣屋を構え、戦いを展開した。

12 三ツ石古戦場（嘉納山山頂付近）

四境の役の際、松山藩軍と長州軍（第二奇兵隊・浩武隊等）が激突した古戦場で、この高地をめぐって激しい攻防戦が繰り広げられた。長州軍は、制高作戦によってこの地での戦いを有利に進めたという。

第二次世界大戦の頃には陸軍高射砲陣地が築かれた過去も持つ。すぐ下にはゆっくりできる東屋や両軍の戦死者の墓がある。

13 護国団陣跡（西安下庄）

僧侶たちによって結成された護国団は、松山藩軍を撃退した16日、大江屋周助宅を陣屋として使用した。同宅跡地には、この事実を後世に伝えるため、昭和55年（1980）大元真一氏によって建立された石碑がある。陣跡は高所にあり、松山藩軍が上陸した甲の山や三ツ松を眼下に安下庄湾を一望できる絶景場所である。

14 四境の役大島口戦跡碑（源明山）

16日の激戦地の一つであり、大木や大石を落とすなど島民の活躍のあった旧源明峠には、四境の役供養塔と山頂まで残り0.3kmを示す標識が建っている。山頂に登ると、四境の役の戦地の一つを示す「大島口戦跡碑」が建つ。源明山から嘉納山へ続く遊歩道の途中に多島美を望める絶景スポットがある。

15 大谷周東の墓（照林寺）（戸田）

大谷周東は、大谷小郎と名を変えて義勇隊にへり、その後、護国団の器械方となった。大島口の戦いでは、6月11日、久賀宗光への幕府軍の上陸戦の際、獅子奮迅の活躍を見せたが、敵弾を受け25歳の若さで戦死した。照林寺境内に墓所があり、ハ田山招魂場にも合祀されている。

16 西蓮寺（東屋代）

四境の役大島口の戦いで、第二奇兵隊の本陣となった。この戦いで一時幕府軍と松山藩軍に久賀、安下庄を占領されたが、藩祖毛利元就の命日である6月14日に林半七、世良修蔵らの率いる第二奇兵隊等が大島に向けて出陣し、長州藩に勝利をもたらした。境内には本陣であったことを示す石碑が建立されている。

17 残兵新首跡（首切り地蔵）（小松開作）

屋代川河原（明新橋から約200m上流）にある。新首刑を行ったところで、享保の一揆の時には、一揆に加担した一味がここで切られたという。四境の役では捕らえた松山藩士分14名を長州藩兵が処刑した地ともいわれ、地蔵尊には首がない。士分でない7～8人の補虜は、尊王の大義を説諭し、帰藩させている。

18 妙善寺（小松）

この寺は、幕末期には寺領の一部を英武場（武術の修練場）として提供し、「給御門の変」後には、変に携わった志士たちを招きかくまった。

住職の三国貫雄は、大島海岸の事情に詳しく、四境の役の際、第二奇兵隊小荷駄役として船舶や船頭の斡旋に尽力した。戦いの後は、第二奇兵隊本隊凌遅後の島内の守りを一手に引き受けた。